

コミュニティスペースの意義としての「味方」と「見方」の提供：大崎上島、ミカタカフェの事例

目黒 紀夫・稲葉 優花

Providing “Allies” and “Perspectives” as the Significance of Community Spaces: The Case of Mikata Café in Osakikamijima

Toshio MEGURO and Yuka INABA

Osakikaisei Highschool is located on Osakikamijima, a remote island suffering from depopulation and an aging population, in Hiroshima Prefecture. Osakikamijima Town has adopted a policy of “an island of education” to overcome this problem and has started the High School Attractiveness Project. It produced certain results, but in the midst of the Coronavirus Pandemic, efforts were made to open what is called “Mikata Café” and provide high school students with varied “perspectives” and “allies.” The purpose of this article is to organize basic information on the Mikata Café and examine its outcomes and significance based on interviews with the people involved. Consequently, it was found that Mikata Café played a role that high school did not play, especially in providing students with “allies.” However, since this study is based on interviews with a small number of people, a larger scale study is recommended for the future.

I. はじめに

1. 背景と課題：コロナ禍の「教育の島」にオープンしたミカタカフェ
2. 方法：関係する大人と子どもへのインタビュー

II. 調査対象の概要

1. 大崎上島の概要
2. 大崎海星高等学校の概要

III. 結果と考察

1. ミカタカフェの概要

2. ミカタカフェ設立の経緯

3. 大人にとってのミカタカフェ

- (1) ミカタカフェの目標
- (2) ミカタカフェの今後

4. 高校生にとってのミカタカフェ

- (1) きっかけとなったBの場合
- (2) 生粋の島っ子Cの場合
- (3) 活動的な島外出身者Dの場合

IV. 結論と今後の課題

I. はじめに

1. 背景と課題：コロナ禍の「教育の島」にオープンしたミカタカフェ

2014年5月、民間会議体である日本創生会議の人口減少問題検討分科会は、日本全国の地方自治体の約半数において2010年から2040年にかけて20歳から39歳の女性が5割以上減少するとの

推計を発表した（日本創生会議・人口減少問題検討分科会）。この「消滅可能都市」に関する報告を大きな契機として、政府による「地方創生担当相」の新設や「まち・ひと・しごと創生本部」の設置（いずれも2014年）を始めとして、地方創生¹の試みが官民を挙げて様々に取り組みられるようになった（みずほ総合研究所2018）。

多岐にわたる地方創生の試みの1つとして、「高校魅力化プロジェクト」がある²。それは、日本

海に浮かぶ離島である中ノ島（島根県隠岐郡海士町）に位置する島根県立隠岐島前高等学校で、2000年代末に始まったものである。「魅力的で持続可能な学校と地域をつくる」ことを目指し、学校と行政と地域住民とが協働して様々な取り組みを進めた結果、廃校の危機に会った離島の高等学校に日本国内各地に加えて海外からも生徒が集まるようになった（「島前教育魅力化プロジェクト」ウェブサイト）。これ以後、同様の取り組みは全国的に増加してきた（岩本2019）。

瀬戸内海で2番目に大きな離島である大崎上島（面積38.27km²、2024年3月末における人口は6,744人）は、広島県豊田郡大崎上島町の大部分を占める。多くの離島と同様に過疎高齢化が進行し高齢化率が4割を超えていた大崎上島町は、2015年10月に策定した「大崎上島町まち・ひと・しごと総合戦略」の中で、「教育の島」の推進、すなわち「多様な人材を育てる教育の島づくりを進める」ことを最重点政策に位置付け、その取り組みの第1として、島内唯一の高等学校であり生徒数の減少から統廃合の危機にあった広島県立大崎海星高等学校（入学定員40人、2014年4月時点の生徒数は67人）の「魅力化」に取り組んだ（「大崎上島町 教育の島」ウェブサイト）。

結果として、地域住民とともに様々な体験や挑戦を地域の中で主体的にできる学校として大崎海星高等学校には県外からも生徒が集まるようになり、2019年度の生徒数は102人（うち県外出身者は14人）にまで増加した（大崎海星高校魅力化プロジェクト2020）。この事実から、大崎海星高等学校を高校魅力化プロジェクトの成功例と見なすこともできるだろう。しかし、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が2020年に拡大すると、学外はもちろん学内における生徒の活動も制限されてしまった。そうした中で2021年11月、一般社団法人まなびのみなどは、カフェ併設型のコミュニティスペース「ミカタカフェ」を開設した。まなびのみなどは、大崎海星高校魅力化プロジェクトでコーディネーターを務めた取釜宏行が中心となって設立した団体であり、大崎上島および広島を拠点に「高校を起点とした町づくり」から「学びを起点とした持続可能な地域社会づくり」を目指す（「一般社団法人 まなびのみなど」ウェブサイト）。具体的には、高校・行政・

民間の協働に向けたシンポジウムの開催や大学生向けのインターンシップの提供、それに島内の小学生・中学生・高校生・高専生の様々な活動のサポートなどを行っている。

ミカタカフェの店名にある「ミカタ」には、「子どもたちが“味方”に出会える場所」と「いろいろな世界の“見方”を教えてもらえる場所」という2つの願いが込められている（「一般社団法人まなびのみなど」ウェブサイト）。高校魅力化プロジェクトによって一定の成果が生まれていた大崎上島において、高校生を始めとする子どもたちに「見方」と「味方」を提供しようとする取り組みが行われたのはなぜなのか、また、その結果はどのようなものなのか。この2つが、本研究の出発点にある問いである。本稿では、ミカタカフェがいかなる場所であるのかという基本的な情報を整理した上で、関係者へのインタビューに基づきミカタカフェの意義を検討することを目的とする。

2. 方法:関係する大人と子どもへのインタビュー

本稿は、文献およびウェブサイトなどインターネット上の2次資料と関係者へのインタビューによって得られた1次資料とに基づく。現地調査は、2023年10月7日から10月16日、11月11日から13日、また、2024年3月28日に行った。これとは別に、関係者にはオンラインでのインタビューも行った。インタビューの対象者は、一般社団法人まなびのみなどのメンバーでありミカタカフェの代表でもあるA、ミカタカフェの設立の契機となった発言をした大崎海星高等学校の元生徒B（2022年度に大崎海星高等学校を卒業）、調査をした2023年度に大崎海星高等学校に在籍しておりミカタカフェの利用頻度が高い生徒のうち大崎上島出身のCと島外出身のDの4人である。

II. 調査対象の概要

1. 大崎上島の概要

大崎上島町は、瀬戸内海のほぼ中央に位置する芸予諸島に浮かぶ大崎上島とその周囲の小島を町域とし、広島県豊田郡に属する。町の面積は43.11km²、大崎上島の面積は38.27km²であり、2024年3月末における人口は6,744人、世帯数は

4,076である（「大崎上島町」ウェブサイト）。2015年および2020年に行われた国勢調査の結果は、それぞれ人口7,992人と7,158人であり、この5年間の人口減少率は10.4%となる。また、各年において65歳以上が占める割合が44.9%と46.1%、15歳未満の割合がそれぞれ7.1%と7.7%である。本州との間にはフェリーの航路が2つあり、大西港と安芸津港（東広島市）、垂水港・白水港と竹原港（竹原市）が20分から30分程度で結ばれている。

大崎上島町の主要産業は農業、造船業、精錬業である。農林水産省のデータサイトである「わがマチ・わがムラ」によれば、林野面積15.41 km²に対して耕地面積は5.35 km²（田耕地面積0.36 km²、畑耕地面積4.99 km²、いずれも2022年の面積調査の結果）、農業産出額11億9000万円の大半を占めるのは果実の9億8000万円であり（2021年の市町村別農業産出額の推計値）、その大部分を占めるのは温州みかんを始めとする柑橘類である。

大崎上島には、認定こども園1園、町立幼稚園1園、町立小学校3校に加えて、町立中学校1校、県立高等学校1校（大崎海星高等学校）、国立高等専門学校1校、県立特別支援学校分教室1校、それに、2019年に開校した広島県立の中高一貫校である叡智学園がある。大崎上島町が「教育の島」の推進を最重点政策に位置付けてきたことは既に述べたが、その取り組みの1つとして、広島県が「世界で活躍するグローバルリーダーを育成し『学びの変革』を先導的に実践する学校」として開校を計画していた広島叡智学園の誘致と、アトランティック大学、ハミルトン大学、ノーサンプトン大学、スワースモア大学などの海外の大学との町としての交流がある（「大崎上島町 教育の島」ウェブサイト）。また、「教育の島」が掲げられた2015年から、大崎上島町において地域おこし協力隊³が活動している。

2. 大崎海星高等学校の概要

大崎上島には、大崎海星高等学校以外にも広島商船高等学校と広島叡智学園がある。2024年4月からは広島商船高等学校の生徒がミカタカフェの店長を務めるようになったが、これまでのところミカタカフェを主に利用してきたのは、道路を

挟んで反対側に位置する大崎海星高等学校の生徒である。そこで、本論に入る前にまず大崎海星高等学校の概要を説明する。

高校魅力化プロジェクトの対象となった大崎海星高等学校の現在の入学定員は40人、在校生の総数は85人である（「広島県立大崎海星高等学校」ウェブサイト）。2014年2月に広島県教育委員会が「今後の県立高等学校の在り方に係る基本計画」を決定し、生徒数が80人未満の学校は統廃合の対象とすることを打ち出した時の生徒数は67人であった。高校魅力化プロジェクトについて、それに携わった大崎海星高等学校の関係者は「主に離島・中山間地域など、人口減少の影響で統廃合の危機に立たされた公立高校を再生し、高校と教育を核とした地域活性に挑む壮大な」プロジェクトと説明する（大崎海星高校魅力化プロジェクト2020:12）。また、高校魅力化プロジェクトを事業として展開する株式会社Prima Pinguinoは、「その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の3本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクト」とまとめる（「高校魅力化プロジェクト」ウェブサイト）。

大崎海星高等学校の独自カリキュラムとしては、1年生から3年生にかけて総合的な探求の時間に行われる「大崎上島学」がある。これは地域をフィールドとして課題解決型の探求学習をするもので、1年生の「羅針盤学」では「自らの価値観や信念、特徴を知り、方向性や志を立てる」こと、「自分の得意や自分のプロジェクトを持ち、将来の夢を実現性のあるものに導く」ことが、2年生の「潮目学」では「現実の世界を知り時代の潮流を読む」こと、「世の中の変化を正しく理解し、時代に合った技術の活かし方を知る」ことが、そして、3年生の「航“界”学」では「志と夢を実現させるためのリーダーシップとスキルを学ぶ」こと、「プレゼンテーション、ファシリテーション、チームビルディングを学ぶ」ことが目指される（「大崎海星高等学校」ウェブサイト）。この大崎上島学には地域の人びとによる講義や地域の人びととの各種活動が含まれ、生徒は教室の外、地域の様々な現場や人びとの仕事や生活の空間において様々な形で学んでいく。

ここで、「羅針盤学」の説明にある「自分のプロジェクト」として、大崎海星高等学校の生徒は「マイプロジェクト⁴⁾と呼ばれる自己探求・地域探究のプロジェクトを実践し、大崎上島という場所を前提として、自分なりに定めたゴールに向かって努力や挑戦、試行錯誤を重ねることになる。マイプロジェクトは全国的な広がりを持つ探究学習のことで、文部科学省の後援下で「全国高校生マイプロジェクトアワード」が開催されている。大崎海星高等学校の生徒の活動もマイプロジェクトアワードにエントリーしてきており、2018年度には「島の仕事図鑑」が、また2022年度には「お年寄りとの交流プロジェクト」が、広島県の代表としてその全国大会である「全国 Summit」に選出されている⁵⁾。

大崎海星高等学校の魅力化としては他に、県外から入学する生徒のための住まいであり、離島の生活を様々な形で支援をするための教育寮「コンパス」の設置や、教科指導だけでなくキャリア教育も含めて行い、生徒が自らの将来や志なども含めて広い意味で「自律した学習者」となることを支援するための公営塾「神峰学舎」の開設がある。神峰学舎は大崎海星高等学校の校舎内に設けられており、平日の授業終了後、午後8時まで開いている。個別指導と同時に自立学修を基本としており、生徒にはまずは自分なりに考えたり試行錯誤したりすることが求められている。大崎上島における地域おこし協力隊の活動はこれらの運営に携わるものとなっている。

Ⅲ. 結果と考察

1. ミカタカフェの概要

ミカタカフェは、大崎海星高等学校の道路を挟んで隣、また、大崎上島町大崎支所のはす向かいに位置する。約30年前まで「タカキベーカリーアリス」というパン屋として営業をしていた2階建ての古民家を改修したもので、今なお1階のガラス窓に残されている店名を見て懐かしむ住民もいるという。「カフェ併設型のコミュニティスペース」と説明されることもあり、1階にはカフェスペースとコミュニティスペース⁶⁾に加えて、奥にはイベントの際などに利用するキッチンや小部屋があり、2階は学習スペースとなっている。カフェ

スペースにはテーブルが3つ、10席ほどが用意されている。ミカタカフェとして古民家が生まれ変わる過程でカフェスペースは大きくリノベーションされているのに対して、約14畳のコミュニティスペースはかつての様子を色濃く残す畳敷きの和室であり、かつての居住者の親族の写真が変わらず飾られていたりもする。コミュニティスペースには机以外に本棚もあり、実用書や文芸書、絵本などの様々な本やゲームなどが置かれている。コミュニティスペースにはカフェとは別の出入り口もあるが、カフェスペースから移動することもできてカフェで購入したものを食べることもできる。そのため、このスペースで作業をしたり読書をしたりする人、ゲームで遊んだりする人もいれば、小さな子どもを遊ばせながら飲食やおしゃべりを楽しむ人、ふらっと立ち寄る人などもある。2階の学習スペースは14畳ほどの広さで、中学生や高校生が勉強に集中できるように用意された空間である。窓際に長机が置かれている以外に、オープン後に利用者の声を受けてリノベーションをしており、かつての押入を改修して何人かで一緒に話し合いながら作業をしたり、立った姿勢のまま勉強をできるように机の高さを変えられるスペースも設けられている。

ミカタカフェの基本的なコンセプトは「誰もが誰かのミカタになれる場所」というものである（「ミカタカフェ」ウェブサイト）。店名の「ミカタ」に「子どもたちが“味方”に出会える場所」と「いろいろな世界の“見方”を教えてもらえる場所」という願いが込められているのは前述の通りであるが、「誰もが誰かのミカタになれる場所」という表現からも分かる通り、高校生などの子どもの活動を大人が応援するための場所でもあるが、それと同時に、中学生はおろかそれよりも小さな子どもから高齢の大人まで幅広い年齢層が自由かつ気軽に利用でき、様々な背景を持つ人びとの出会いと交流が意図されてもいる。

ミカタカフェの代表を務めるのはまなびのみなどのメンバーである30代半ばの男性Aである。Aは東京で生まれて大学まで卒業、就職もした後、2020年に地域おこし協力隊として大崎上島に移住した。飲食店を営む上で必須の食品衛生責任者や金銭管理はまなびのみなどのメンバーである「大人」が担っている。一方、カフェの接客や調

理などを担当するスタッフおよび店長は高校生または高専生が務めてきた（2023年度であれば高校生5人が働いていた）。商品の開発はそうした高校生・高専生が中心になって行なってきており、休業日や開店前の時間に集まって試作をすることもある。

カフェで提供されているのは、コーヒーや紅茶などの飲み物が十数種類と、サンドイッチやケーキなどの食べ物5種類程度である（期間・季節限定の商品も多い）。そして、大人が子どもの味方となってその活動を応援するという意味で、カフェの商品には大人価格と学生価格の2種類が設定されている。例えば、コーヒーは学生であれば300円で購入することができるが、大人であれば450円となる。サンドイッチやケーキの多くは大人価格が400円、学生価格が300円となっている。カフェの売り上げは、コミュニティスペースにおける諸活動や運営費に充てられている。なお、ここでいう「学生」とはミカタカフェのコンセプトでいうところの「子ども」と基本的に同じ意味で、未成年者ではなく大学生以下の就学中あるいは未就学の者を指す。逆に「大人」とは、「子ども／学生」を終えて何かしらの仕事に就いている者のことであり、成人であっても就学中であって未就業であれば「学生」という扱いになる。

ミカタカフェのスタッフや商品、イベントなどについては、ウェブサイトだけでなくInstagramなどのSNSを通じて情報が発信されている。なお、ミカタカフェは2023年度までは、木曜日と金曜日の午後1時から午後8時（木曜日はカフェスペースは営業せず）、土曜日と日曜日の午前10時から午後5時、それに不定期で祝日に開いていたが、2024年度から木曜日には開かれなくなった。

2. ミカタカフェ設立の経緯

ミカタカフェの設立に際して中心的な役割を果たしたのは、その代表を務めるAである。ミカタカフェの運営主体となっているのはまなびのみなどであるが、その具体的なあり方にはAの考えが色濃く反映されている。そのため、本項ではAの経歴なども含めて設立までの経緯を説明する。

東京都の出身であるAは、早稲田大学教育学

部を卒業し、大手菓子メーカーや教育・生活関連の事業を展開するグループ企業で働いた後、2020年に地域おこし協力隊として大崎上島に移住した。Aは地域おこし協力隊として2020年4月から2023年3月まで、大崎海星高等学校の校舎内に設置された公営塾「神峰学舎」で講師として働いたが、それと同時に、2020年の移住直後からまなびのみなどのメンバーとしてその活動にも従事しており、マイプロジェクトに関する事業なども手掛けてきた。2023年4月からは大崎上島大学の講師も務めており、引き続き大崎海星高等学校の生徒の教育に携わっている。

大崎上島に移り住んだ時点で、Aは島と都市部の教育格差を無くすため、島の高校生が島外の大学生や大人と気軽に交流ができる場所を作りたいと考えていた。また、都市部のファストフード店やカフェのように高校生が学校帰りや休日などに気軽に立ち寄ることができ、地域内外の大人と気軽に交流することができる場所を作りたいと考えてもいた。しかし、Aの移住当初はコロナ禍が本格化する前であり、大崎海星高等学校の生徒は大崎上島学を通じて地域の大人とつながりを持つことができた上に、公営塾のように放課後に高校生同士で集まることができる場所も少なからずあったので、学校外に交流の場を作るというアイデアの実現に向けて動き出すことはなかった。

その後、コロナ禍が深刻化し、大崎海星高等学校の内外における生徒の活動は大幅に制限される。学校自体が休校となり授業も行われなくなり、寮に暮らす生徒は自室から出られなくなることさえあった。そうした中で、2021年1月、Aは大崎海星高等学校の1年生であり、県外からの入学者でもあったBの「思っていた高校生活と違う」、「だまされました」という言葉を耳にし、衝撃を受ける。高校生が学外で地域の大人と交流したり新しいことに挑戦したりするための場所が必要だと考え、まなびのみなどの他のメンバーと話し合い、まなびのみなどの事業としてミカタカフェの開設に取り組み始めた⁷。

その約1か月後、もともと「タカキベーカリーアリス」というパン屋であった古民家を借りることができることとなり、同年5月からその改修工事が開始された。専門の業者だけでなく地域の子ども（小学生・中学生・高校生）や大人、また、

Aの母校である早稲田大学の古谷誠章研究室（理工学術院創造理工学部建築学科）も協力をした。コミュニティスペースは古民家の作りを踏襲して畳やふすまを入れ替える形にしたが、カフェスペースは一から作り替えている。また、2階の学習スペースについては、オープン後に古谷誠章研究室のメンバーと利用者が交えて話し合うなどした上で大幅な改修をしている。約半年で改修工事は終わり、2021年11月21日にミカタカフェはオープンした。また、2021年6月にまなびのみなどは日本財団の「子ども第三の居場所事業」に応募し、採択された。この結果、1、2年目は720万円、3年目は500万円の資金を受け取ることとなった。また、同財団からiPad10台が寄贈されており、子どもたちが外国語の学習やイラストの描画などで利用している。

3. 大人にとってのミカタカフェ

(1) ミカタカフェの目標

Bの一言を聞いてミカタカフェの設立を決意した時点におけるAのアイデアは、「カフェ併設型の居場所」をつくるというものだった。より具体的には、Bの「思っていた高校生活と違う」、「だまされました」といった発言を聞いて「何かしなきゃ」と思い、そこから「高校生たちが地域のオトナたちと自然にアタリマエに出会える場所をつくらう」という決心をすることになる⁸。

その後、ミカタカフェの事業に関わるまなびのみなどのメンバーとの間で話し合いを重ね、ミカタカフェの目標として2つの事柄に合意をした。第1の目標は、高校生が主体的にカフェの運営を行っていくことである。現在でもアルバイトとしてカフェで働いているのは全員が高校生または高専生であり、メニューの考案や作成も全て子どもが行っている。将来的な目標としては、現在は大人が行っている金銭管理なども含めて運営を全て子どもが行っていく形にしたいと考えてもいた。ここには、大人がすることに子どもが参加するのではなく、子どもがやりたいことを実際にやれるように大人がサポートをしていく形にできるだけ変えていきたいという思いがある。そのためにミカタカフェの運営方針を柔軟に変えていくことも視野に入れていた。これは「ミカタ」に込められた願いのうち、特に新しいことにチャレンジした

いという「子どもたちが“味方”に出会える場所」というものに沿ったものと言えるだろう。

もう1つの目標は、高校生と大人が偶発的に出会い、おたがいのプロジェクトや挑戦を応援し、さらには共に行っていく関係が生まれる場所を作るということであった。これは「いろいろな世界の“見方”を教えてもらう場所」という願いというよりもむしろ、「誰もが誰かのミカタになれる場所」というコンセプトに沿ったものとも考えられる。つまり、高校生が大人から学ぶだけでなく、大人が高校生の挑戦に触発されて新しい発見や学びをできる場所になって欲しいというのがまなびのみなどのメンバーの考えであった。

(2) ミカタカフェの今後

ミカタカフェを通じて高校生が具体的にどのような見方と味方を獲得したのかは次項で説明するが、オープンから2年以上が経過する中で、Aの中ではミカタカフェに関して一定の手ごたえと同時に今後についての新たな考えも生じている。その第1は、10年後のミカタカフェとして、現在のカフェスペースがなくても成立している状態を目指したいというものである。

ミカタカフェという名前であるのに、店内で用意される飲み物や軽食を購入して飲食するスペースがないというのはおかしな話のように思える。しかし、Aがミカタカフェを作ろうと最初に思った時に考えていたのは、「高校生たちが地域のオトナたちと自然にアタリマエに出会える場所」あるいは「カフェ併設型の居場所」を用意することであって、飲食店の開業ではなかった。カフェスペースがあるから人が集まり、そこで交流が生まれるという流れが確かに存在するとAも考えている。しかし、Aの現在の思いとしては、カフェスペースがなくても同じ志を持つ人びとが自然と集まりつながることができる場所を作れるならば、そのようにしてみたいという。

実際にカフェスペースを無くすのかどうかはまだ分からないというが、Aがこのように考える大きな理由として、一度やり始めたことを「続けること」以上に新しい何かを「始めること」を大切にしたいということがある。例えば、カフェスペースの現在の利益率は経営の観点からすると十分とは言いがたいが、だからといって「カフェ

を続ける」ためにそれを向上させることにばかり意識や労力を割いてしまうと、高校生が何か新しいことを始めたいという時に、そのチャレンジを支援することはできなくなってしまうかもしれない。そこにはA自身の性格も関係しているし、また、日本財団の資金援助が間もなく終わりを迎えるという事情も関係している。そうでなくても、高校の生徒もカフェのスタッフも1年で（部分的にであれ）入れ替わっていく環境を考えるならば、「続けること」と「始めること」のバランスをいかに取っていくのかはミカタカフェの今後の大きな課題の1つとなり得るだろう。

ミカタカフェを通じてAが持つようになったもう1つの新たな考えは、それが大人に与える影響についての気づきである。設立当初からミカタカフェが高校生だけを対象にしているわけではないことは上で書いた通りだが、実際にミカタカフェをオープンさせて高校生が新しいことに挑戦するのを間近に見ると並行して、Aは高校生の活動に刺激を受けた大人が新しいことを始めるのをいくつも見てきた。例えば、大阪と大崎上島の間を定期的に移動する形で二拠点生活を送っていたある女性は、かつてメガネ屋であったが閉店後は使われずにいた建物を利用してカレー屋を始めた。こだわりのスパイスに加えて島で育てられた野菜を使ったカレーを販売しており、営業日は週末の2日間と木曜日だけであるが評判を集めているという。こうした動きがいくつも見られるという時、Aとしては高校生が何かを「始めること」だけでなくそれを直接・間接のきっかけとして地域の大人が何かを「始めること」についても関心を向けていきたいという。

4. 高校生にとってのミカタカフェ

(1) きっかけとなったBの場合

Bは京都府出身で、2020年4月に大崎海星高等学校に入学し、これを機に大崎上島に移り住んだ（その後、2023年3月に同校を卒業し徳島県の大学に進学）。Bが大崎海星高等学校の存在を知ったのは、中学生の時に「地域みらい留学」という制度を知り、その説明会に参加したことがきっかけである⁹。初めは大崎海星高等学校ではない学校に興味を持っていたが、地域みらい留学の合同説明会で大崎海星高等学校の卒業生が在学

中に行っていたマイプロジェクトの話を聞く中で、学校の外で地域の人びとと連携した活動してみたいとBは思うようになった。また、大崎海星高等学校では、大崎上島の自然の中で地域の人や環境を題材にした実践的な授業を受けられることを知り、そうした授業を受けてみたいということで大崎海星高校を選びもした。

そうして大崎海星高等学校に入学したBだが、COVID-19の流行のため、1年生の間に2か月の休校や大幅な外出制限を経験することになる。その間、通常であれば大崎上島として行われている地域を素材とした学びは行われず、教室の中で自己理解のための作業を行うだけであった。それは自分がどのような価値観を大切にしているのか、どのような将来像を描いているのかなどを理解する授業だったが、地域との関わりを通じた学びを期待していたBにとって非常に大きな不満の源であり、地元の京都の学校と何ら変わりがないのではないかと悩むこともあった。

Bは神峰学舎に通っており、そこでは講師を務める地域おこし協力隊の人びとと生徒との間で定期的に面談が行われていた。協力隊員と生徒との距離感はとても近く、Bも協力隊の大人を先生というより歳の離れた友だちのように感じ、プライベートな相談などもしていた。Bは神峰学舎をとて居心地の良い場所だったというが、それはあくまで学校内にある施設であり、Bが国内留学をしてまで求めていたような場所ではなかった。地域の人たちとつながることが難しい状況でBの学校活動に対するモチベーションはとても低くなり、つまらない、しんどい、行きたくないといった思いを抱いていた。そうした中で2021年の1月、当時、神峰学舎で働いていたAに対して、「思っていた学校生活と違う」、「だまされた」といった不満を漏らした。

その後、Bが高校2年生となった2021年の6月にミカタカフェはオープンした。Bはそれが開いている日はほぼ毎日来店し、学習スペースで勉強をしたりコミュニティスペースでそこにいる人と話をしたりしていた。Bがミカタカフェに行く動機は1つではなく、そこに行けば誰かに会えるのではないかということもあれば、各自が個室に暮らしているとはいえ寮では常に周りに人の気配があって落ち着いて過ごすことができないので、

自分だけの時間を作るために行くこともあった。学習スペースにおいて受験生の横で集中して勉強をするために訪れることもあったし、公営塾とは違って勉強に疲れた時にはカフェスペースでコーヒーやケーキを食べたり友人とおしゃべりをしたりすることができ、気楽に勉強に向き合うことができたのでミカタカフェで勉強をするということもあった。公営塾が空いている時間帯はそこで勉強をして、その後、ミカタカフェが閉店するまでその学習スペースやコミュニティスペースで過ごすこともしていたという。

Bにとって重要なミカタカフェにおける出会い・交流は1つではない。まず、オープン当初のミカタカフェには、島外出身者であり高校魅力化プロジェクトの中で高校と地域の橋渡しをするコーディネーターの仕事をしている20代の女性が常駐していた。Bはこのコーディネーターに自分が抱えている学校や寮に対する不満を話したり、まだ明確にはなっていない自分の興味関心や将来について相談をしたりしていた。年が近いこともあり、Bはこの人に安心して自分のことを打ち明けることができ、そのやり取りを通じて自分の興味関心として「地域」が重要なキーワードであることに明確に気づき、実際に地域に関する学びができる大学に進学することも決めた。

また、Bはミカタカフェに通う中で、地域おこし協力隊のある隊員からBと同じくサイクリングを趣味とする男性を紹介してもらった。その人物は大崎上島の出身で、広島商船高等専門学校の卒業生であった。島外で船舶関連の仕事をした後に大崎上島に帰ってきてゲストハウスを経営していたが、町おこしの活動も行っており島の様々な人とつながりを持っていった。Bはこの男性と直ぐに打ち解け、休みの日には一緒にサイクリングをするようになった。地域のために活動を行っており地元の人たちとの繋がりが強いこの人物にBは強い憧れを抱くようになり、彼のこれまでの体験談を聞くだけでなく、Bの将来について話をすることもした。そうした中で、彼のゲストハウス経営の軸が「ただいまと言える場所をつくる」というものであることをBは聞いた。それはつまり、大崎上島が地元ではない人であっても、ゲストハウスで過ごした時間や体験を通して大崎上島を自分の「ホーム」のように感じて欲しいという意味

であった。この話を聞いてBは、ゲストハウスなど人びとが安心できる居場所をつくる人間に自分も将来はなりたいと考えるようになった。そのために現在は徳島の大学において地方創生についての勉強に励む傍ら、Bは日本国内各地のゲストハウスや民宿を訪れることもしている。大学進学後もBは広島市内でゲストハウスを運営している人物を紹介してもらい、より大都市に位置しており外国人観光客も多く利用するゲストハウスを知るなどしている。

この2人以外にも、ミカタカフェで出会った人で現在までBが関係を持ち続けている人は複数おり、高校生の頃のそうした出会いを通じてBは未知の世界への好奇心を培われたし、ゲストハウスという職業や「ホーム」と思える場所をつくるという将来のビジョンを得ることもできた。この点で、Bはミカタカフェを通じて「いろいろな世界の“見方”」を獲得したといえるのではだろうか。そうでなくても、ミカタカフェでの大人との出会いと交流を通じて、Bが自らの進路やキャリアについて具体的に考えたり選んだりすることができるようになったことは間違いがない事実である。また、当時、学校や寮よりもミカタカフェの方がBにとって居心地が良かったという。特に、ミカタカフェに行けば彼が親交を深めたコーディネーターに必ず会えるという安心感はBにとって重要なものであり、彼にとって最上の「味方」だったと考えられる。

(2) 生粋の島っ子Cの場合

Cは大崎上島の出身であり、2023年度の調査の時点で大崎海星高等学校の2年生であった。自らを生粋の島っ子だという女子学生であり、中学校も島内であった。実は、Cは高校に進学するかどうかを迷っていた。それが大崎海星高等学校に進学することを決めた理由は、中学生時代に大崎海星高等学校の生徒と交流する機会があり、そこで聞いた地域活動を自分もやってみたい、地域の課題と向き合う活動をしてみたいと思ったからだった。Cは大崎海星高等学校に進学した後、「みりょくゆうびん局」という島の魅力を発信する部活動に参加するとともに、高校生マイプロジェクトアワードへの参加を検討するなど様々な活動に精力的に取り組んでいる。そして、このようなC

の興味関心の背景にはミカタカフェの存在が大きかった。

島生まれ島育ちのCであるが、ミカタカフェができるまでは学校の友人と先生のみとの関わりが自身の交流関係の主なものであり、地域の人との関わりは道ですれ違った際に挨拶をする程度であった。挨拶をしても、その人がどこの誰で、具体的に何をしている人なのかなどは知らなかったし、そういうことを話すこともなかった。そうした状況は、Cが中学3年生の時にミカタカフェがオープンし、そこを訪れるようになったことで変わった。学校の友人とコミュニティスペースを利用していると、そこで面白そうな話をしている人たちの輪に入ることもあれば、そこに来ている島の大人と話をする機会も生まれた。そして、大人と会話をする中でCは、地域と関わろうとする高校生の積極的な姿勢を地域出身の大人がとても嬉しがっていることを知る。さらに、島の大人だけでなく島外から来た大学生（ミナトカフェの改修に協力する早稲田大学の学生やまなびのみなどでインターンをしている大学生）と出会い交流を重ねる中で、そうした人たちとの交流を楽しむようになっていった。

そうしたCにとって大きな意味を持つ出会いとして、コミュニティスペースで友達とおしゃべりしている時に出会った島の女性がいる。この女性は絵本図書館「ひみつきち」という、絵本だけでなくおもちゃもあり、週末には未就学児や小学生などを対象とする活動が開かれる場所で働いていた。Cはもともと子どもがとても好きで、将来は保育士になりたいと考えてもいた。そのため、コミュニティスペースで上述の女性から話を聞くと、子どもと関わることのできる「ひみつきち」にとっても興味を持ち、時間がある時にはそこで手伝いをするようになった。そして、実際に小さな子どもたちと関わる中で、その楽しさと同時に難しさも身をもって知るようになり、自分がはたして子どもたちとの間でどういう関わり方を実現したいのか、保育士になるとしてどのような保育士に自分になりたいのかということを考えるようになった。また、子どもとの関わりから大人も学ぶことたくさんあるということも知ることができた。こうした経験を経て、以前であれば漠然と保育関係の仕事をしたいと思っていたCであっ

たが、具体的にどんな働き方を自分がしていきたいのかをより深く考えるようになった。そして、そのことを大崎海星高等学校におけるマイプロジェクトとして探究していくことにしたのが、「島と子供プロジェクト」である。具体的には、大崎上島の自然を題材にして、子どもたちが楽しむだけでなく高校生や大人も一緒になって大崎上島の自然や魅力を学んでいけるプログラムを作りたいと考えている。

来春にアメリカ合衆国への短期留学が決まっているため、「島と子供プロジェクト」の進行は一時停止状態だが、Bの場合と同様、Cもまたミカタカフェを通じた出会いと交流を通じて自身の将来についてより具体的な「見方」を考えることができるようになった。また、そうしたプロジェクトの実現に向けてミカタカフェの大人はCにとって貴重な「味方」でもある。誰でもミカタカフェのコミュニティスペースでイベントを行うことはできるし、そのアイデアが十分に具体化できないとしてもミカタカフェの運営メンバーを始めとする大人たちは相談に乗ってくれるという安心感がある。Cが「島と子供プロジェクト」をやってみたいと思えるのも、それを実践できる場所と応援をしてくれる人たちがあるからであり、この点においてミカタカフェは2つの「ミカタ」を彼女にももたらしていると考えられる。

(3) 活動的な島外出身者Dの場合

Dは岡山県の出身で、2022年4月に大崎海星高等学校に進学、大崎上島に移住をした（調査の時点では高校2年生）。大崎海星高等学校への進学を決めた理由は、地元の学校は勉強や進学を売りにしているところが多く、それよりも学内に限らず学外においても様々な挑戦ができる環境が整っている大崎海星高等学校がとても自分に合っていると考えたからだった。Dは行動力のある人間になりたいと思っており、海星高等学校では学内外を問わず自分がやってみたいと思うことに全力で取り組んでいきたいと考えている。

Dが大崎上島に移住した時にはすでにミカタカフェはオープンしていた。Dはミカタカフェへは最低でも週に1回は足を運んでおり、多い週は開いている4日すべてに行くほどである。Dがミカタカフェでよく利用するのはコミュニティスペー

スであり、その場にいる人との談笑が主である。暇な時間が苦手なため、寮で何もせずに過ごすのであればミカタカフェで誰かと話をした方が有意義な時間が過ごせると考えており、誰かと会う約束をしていなくても、とりあえずミカタカフェに行こうと思うことが多い。行ってみて他に人がいない時は、宿題をしたり1人で考え事をしたりしている。Dはカフェの各スペースを利用するだけでなく、そこで開かれるイベントに関わったこともある。Dは以前から子どもの食育に興味があり、子どもたちが食について考える時間を作りたいと考えていた。そこで、小学生を対象としてミカタカフェで開かれた食育イベントの手伝いをした。それはDにとって学びのある時間になっているという。

Dは地域の人から約100m²の農地を借りて、そこに自分の畑を作ってもいる。これは2023年1月から始めたもので、きっかけは学校において使われていない農地があるという話を教師から聞いたことだった。土地の所有者は、地域おこし協力隊として移住し、神峰学舎で働いている人物である。もともとDに農業の経験があったわけではないが、食に興味があったこともあり実際に自分の手で野菜を育てることにチャレンジしており、週に3回程度水やりをするために畑を訪れるなどしている。これまでにDは、この畑に関する企画として、農作物の手入れや収穫をするイベント、収穫した野菜を料理して食べるイベントなどを7回行ってきた。自らが企画したイベントではなく、ミカタカフェで行われる食育のイベントに野菜を提供したこともある。Dとしては、各種の活動やイベントを通じて、毎日当たり前のように口にしている野菜がどのような過程で育っており、育てることがどれだけ大変なことなのかを知り、それを踏まえて「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉が持つ意味の大切さを子どもたちに伝えていきたいと考えている。そのために、自分が育てた野菜を振る舞う際にはそれを育てる過程について話をするにしている。

Dのこうした活動は一定の注目と評判を集めており、高校魅力化プロジェクトを進め（ようと）している学校や地方創生の取り組みを行っている団体の関係者などが大崎海星高等学校を訪れた際には、Dが同校を代表してそうした大人たちと対話

をする機会が多い。だが、そうした時にDが受ける質問の多くは畑における農業についてのものであり、Dのこれまでの経歴や将来について聞かれることは少なかったという。また、畑や農業のつながりで出会った人との関係はビジネスライクなものになりがちで、おたがいの人となりについての話などはしなかった。それに対して、ミカタカフェにおいてDが誰かと話をするという時、畑をしていることは敢えて言わずに交流をするのでD個人の趣味や将来などについて自由に話ができ、自らの素の姿を知ってもらえると考えている。そもそも、Dが食や農に興味があることは事実だが、Dにとって畑はあくまで人とつながるためのツールであり、それを通じて大崎上島のいろいろな人と交流したいのだという。農業を選んだのも、自分はそれについて何も知らないので1人でやることはできない一方、島の多くの大人はそれをやっているのでは何かしらの関係はおのずと生まれるだろうという考えからだった。実際、農業について初心者であったDが畑を始めると、農業機械を貸してくれたり農作業を手伝ってくれたり、頼んだわけでもないのに地域の大人がいろいろと手助けをしてくれたという。

そうしたDであればこそ、ミカタカフェの空間は自分にとっても合っていると考えているし、大崎上島で生活する上でミカタカフェは必要不可欠な場所だという。Dによれば、高校の中には友達同士で集まったりしゃべったりできる場所がないため、ミカタカフェは友人と過ごす場所としても大切である。また、週末になると公共施設は閉まってしまうため、休みの日に集まれる場所としてもミカタカフェは重宝している。そして、学校生活を送る中ではあまり地域の人と関わる事がない上に、地域の大人も高校生がどんなことをしているのかを知る機会はないので、ミカタカフェのように気軽に人びとが交流できる場所は、お互いのことをよく知り距離感を縮めるためには必要不可欠であるという。

畑を通じて多くの人とつながることができたDだが、自分に新しい「見方」を与えてくれたと思う人を聞くと、そこで挙げたのはミカタカフェにおいて偶然に出会った2人の島の女性であった。その2人の性格はDからすると対照的にも思えるもので、1人はとても明るくにぎやかで、その

人がいる場には笑いが絶えない。もう1人は優しくもまじめで自分の軸がしっかりしている人で、先の1人と比べるならば物静かということになる。最初の出会ってから別々であり、2人が一緒にいることはないため会うとしたらどちらか片方ずつだが、Dにとってこの2人はとても「存在が大きい」人であり、会っている時に居心地の良さを強く感じるという。

話をすることで自分の考えが整理されることもあるというので、この2人がDに新たな「見方」をもたらしている面もあるが、それと同時に2人はDにとってとても大きな「味方」でもある。Dからすると、学校の教師や大崎上島学で出会う大人は味方とは言い難い。彼女が味方という言葉で思い浮かべるのは一緒に横に並んで何かをするような関係であり、一緒に地域を盛り上げようとしている人である。例えば、畑に関して何かやるべきことがある時に「行くよ」と言って実際に来てくれる人が、Dにとって味方という表現にすんなりと当てはまるという。これに比べると、学校で出会う大人の話は「どうやったら成功するか」というような方向性のものであり、それは必ずしも味方と思えるものではない。

畑を中心に考えるとDにとってのミカタカフェの意義は必ずしも大きくないようにも映るが、先の女性2人に限らず、ミカタカフェのおかげでそれがなければつながることができなかつたであろう多くの人とつながることができたとDは述べている。つながりといっても教師と生徒のようなものではなく、一緒に横並びになって共に行動するような関係を求めるDに対してもまた、ミカタカフェは2つの意義ある「ミカタ」をもたらしたと考えられる。

IV. 結論と今後の課題

本稿の目的は、ミカタカフェの基本的な情報を整理し、高校生に「見方」と「味方」の2つの「ミカタ」を提供しようとする取り組みがコロナ禍になぜ始まったのかを確認するとともに、関係者へのインタビューに基づきミカタカフェの意義を検討することであった。

コロナ禍にミカタカフェが開設されたのは、まさにコロナ禍によって、大崎海星高等学校の最大

の魅力であるはずの高校生と地域とのつながりや高校生による地域での挑戦活動が行えなくなったことが理由であった。この点に関しては、本稿を執筆している2024年4月の時点でコロナ禍は終息しており、大崎海星高等学校の魅力は取り戻された。

ただし、それではミカタカフェの役割は終わったのかというと、決してそうは言えないだろう。その理由としては第1に、ミカタカフェを積極的に利用する高校生の中には、学校を通じてでは得られないような「味方」をミカタカフェを通じて得たと考える者がいる事実がある。Dは、大崎上島学として学校の中で地域の大人と出会うことはあるが、それは授業として用意されたものでありミカタカフェにおける偶然的な出会いや素の姿での交流とは異なるという。「いろいろな世界の「見方」」に関していえば、地域おこし協力隊の人間などBやCの進路やキャリアに大きな影響を与えたような人間を大崎上島学の講師とすれば、同様の「見方」をミカタカフェなしに高校生に提供することは可能かもしれない。仮にそうだとしても、BやCの学びや気づきは大人との気の置けない関係における継続的な交流や学外における活動の結果として得られたものであることを考えると、ミカタカフェがあるからこそ高校生が得られる「見方」はあると言えるのではないだろうか。

また、もう1つのミカタカフェの重要な役割として、子どもだけでなく大人が何か新しいことを「始めること」を支援ないし創発するというものが考えられる。これについては、ミカタカフェの代表のAが今まさに関心を寄せている段階であり、本稿においても十分に検討できたとは言いがたい。また、そもそも今回の調査は数人の関係者へのインタビューに基づくものであり、高校生についても地域の大人についてもより広範な調査をする必要がある。この点が今後の最大の課題であるが、コロナ禍も過ぎ去り人びとの地域における活動が復活しつつある今だからこそ、今後の継続的な調査によって研究していきたい。

注

- 1 「地方創生」に類似した表現として「地域再生」や「地域活性化」といったものもあるが、本稿で

はそれらをすべて含む意味で「地方創生」の語を用いている。

- 2 この嚆矢とされる島根県立隠岐島前高校の事例も含めて、「教育(の)魅力化」という言葉が「高校(の)魅力化」と同じ意味で用いられることもある。そもそも、隠岐島前高校の魅力化プロジェクトは、2008年度に策定された「隠岐島前高等学校魅力化構想」を始まりとして、2009年から具体的な取り組みが始まったものだが、現在は一般財団法人島前ふるさと魅力化財団の下で進められており、公式のウェブサイトが設立されているものの名称は「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」である(「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」ウェブサイト)。
- 3 地域おこし協力隊とは、それを所管する総務省によれば、「都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの『地域協力活動』を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組」のことである(「地域おこし協力隊」ウェブサイト)。
- 4 2013年度からマイプロジェクトアワードを企画している認定NPO法人カタリバによれば、「マイプロジェクト」とは「自分ごとになれるテーマから課題設定をして、つくりたい未来に向けたアクションの実行から学ぶ、自己探究・地域探究に特化した実践型探究学習」のことである(「マイプロジェクト」ウェブサイト)。2023年度では、全国約5,000の高等学校のうち627校が「マイプロジェクトパートナー」に登録し、全国で98,935人の高校生が約41,857のマイプロジェクトを実施した(「マイプロジェクト」ウェブサイト)。2021年度から、まなびのみなどはカタリバと協力して「マイプロジェクトアワード広島県 Summit」を運営している。
- 5 「島の仕事図鑑」は、Iターン者・Uターン者も含めて大崎上島で様々な仕事をしている人びとを高校生がインタビューすることで、島で働く・暮らすことや自身の将来、今日の社会について学ぶ・考えることを意図した活動であり、その成果は『島の仕事図鑑』およびその後継企画である『島の未来図鑑(継ぎ手)』、『ひろしまの仕事図鑑』、『旅する仕事図鑑』、『あつまれ海星仕事図鑑』、『繋がれあしあと仕事図鑑』としてまとめられている。また、

「お年寄りとの交流プロジェクト」は、地域の高齢者が孤立しがちな状況を問題と捉え、高齢者の社会参加および高齢者と高校生の交流の促進を目指すプロジェクトである。高齢者と高校生の交流会を3回企画・実施し、毎回のアンケート結果から反省と改善を重ねてきたという(「マイプロジェクト」ウェブサイト)。

- 6 ミカタカフェのウェブサイトなどでは「イベントスペース」と表記されてもいるが、関係者の多くが「コミュニティスペース」と呼んでいる上に、本文に書いたように日常的な利用方法として一般的なのはイベントではなく各自の自由な時間の過ごし方なので、本稿では「コミュニティスペース」と記す。
- 7 Bの発言を聞いた際のショックや「ミカタカフェ」という店名の具体的な由来については、note株式会社が提供するウェブサービスnoteの記事(<https://note.com/katsusuke/n/n48c4668d05f4>)としてA自身が説明している。
- 8 この文章および前文の引用は、注7にも書いたnoteの記事(<https://note.com/katsusuke/n/n48c4668d05f4>)からである。
- 9 「地域みらい留学」とは、「高校魅力化プロデューサー」として隠岐島前高等学校の魅力化プロジェクトを進めた岩本悠や全国高校生マイプロジェクトアワードを企画している認定NPO法人カタリバの代表理事である今村久美が2017年に設立した一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームが全国の地域・学校と共に展開している事業であり、高等学校の3年間または2年次の1年間、日本の各地域にある高等学校へと国内留学しそこでできない体験や挑戦をするというものである(「地域みらい留学」ウェブサイト)。

参考文献

- 岩本 悠 (2019) 「島根県における高校魅力化プロジェクト：地域との協働による魅力ある高校づくりに向けて」、『教育学研究ジャーナル』第24号、47-50頁。
- 大崎海星高校魅力化プロジェクト (2020) 『高校魅力化&島の仕事図鑑：地域とつくるこれからの高等教育』、学事出版。

日本創生会議・人口減少問題検討分科会 (2014) 『「ストップ少子化・地方元気戦略」：成長を続ける 21 世紀のために』、日本創生会議。
みずほ総合研究所 (2018) 『キーワードで読み解く地方創生』、岩波書店。

ウェブサイト

一般社団法人地域・教育魅力化プラットフォーム
<https://c-mirai.jp/> (2024 年 4 月 15 日閲覧)。
一般財団法人島前ふるさと魅力化財団「隠岐島前
教育魅力化プロジェクト」<http://miryokuka.dozen.ed.jp/about/> (2024 年 4 月 10 日閲覧)。
一般社団法人まなびのみなと「一般社団法人 ま
なびのみなと」<https://manabinominato.or.jp/> (2024
年 4 月 10 日閲覧)。
大崎上島町「大崎上島町」<https://www.town.osakikamijima.hiroshima.jp/index.html> (2024 年 4
月 11 日閲覧)。
大崎上島町役場企画課「大崎上島町 教育の島」
<http://kisland.town.osakikamijima.hiroshima.jp/> (2024
年 4 月 10 日閲覧)。
勝瀬祐介「大崎上島『ミカタカフェ』はどこから
きたか」<https://note.com/katsusuke/n/n48c4668d05f4>
(2024 年 4 月 14 日閲覧)。
株式会社 Primo Pinguino「高校魅力化プロジェクト」
<https://miryokuka.com/> (2024 年 4 月 10 日閲覧)。
農林水産省「地域おこし協力隊」[https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/
c-gyousei/02gyosei08_03000066.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyosei08_03000066.html) (2024 年 4 月
11 日閲覧)。
農林水産省「わがマチ・わがムラ」<https://www.machimura.maff.go.jp/machi/index.html> (2024 年 4
月 11 日閲覧)。
広島県立大崎海星高等学校「広島県立大崎海星高
等学校」[https://www.osakikaisei-h.hiroshima-c.ed.jp/
index.html](https://www.osakikaisei-h.hiroshima-c.ed.jp/index.html) (2024 年 4 月 11 日閲覧)。
マイプロジェクト事務局「マイプロジェクト」
<https://myprojects.jp/> (2024 年 4 月 12 日閲覧)。

